

第3章 「震災後」の社会はどうあるべきか



北上の桜

震災直後に授業があったとしたら

早稲田大学政治経済学学術院 岩井 方夫

2011年3月11日、東日本大震災の日には早稲田大学は春期休業期間内につき授業はなく、開講も5月6日まで延期された。しかしもし震災直後に私の授業があったとしたら…

ご家族ご親戚が被害を受けた方もこの中にはいらっしゃるでしょうが、本日、皆さん全

員が無事で教室に集まることができました。まことにありがたいことです。

しかし申すまでもなく、多くの方々が現在苦しんでいます。きょうはいつものドイツ語の授業は行ないません。この大震災で、ドイツ語教師である私が考えたこと感じたことをお話しします。

想像力

「伯父上、どこがお痛みですか。」ドイツ文学史上で最も有名なこの問によりアンフォルタスは苦しみから解放され、パルチヴァール

は聖杯城の主となります。そして離れていた彼の家族が城に集まってきます。といっても、皆さんには何の話かチンプンカンプンですよ。ね。事情を簡単に説明しておきましょう。

かつてパルチヴァールは、聖杯城の主である伯父アンフォルタス王の苦しみを眼前にしたにもかかわらず、「立ち入ったことを尋ねてはならぬ」という常識的教えに縛られて王に声もかけませんでした。パルチヴァールはそれを強く非難されても、理由が分かりません。すべてを呪いすべてを捨てた彼は放浪の旅に出ますが、艱難辛苦の末に自分の過ちに気づき、ついに上の問を發するのです。

苦しむ人を救うのにためらってはならない。手を貸せなくても、せめてひとこと声をかけたらどうか。そんなことを思ってこの有名な問を紹介しました。そして皆さん。有名な問に隠れて分かりにくいのですが、この作品には故郷を捨てて放浪する不幸と家族と共にある喜びも語られています。

パルチヴァールは宗教的体験をとおして思いやりの心に至ります。しかし人間は想像力があれば時間や空間を超越して他人と体験を共有し、喜びと悲しみを分かち合ってパルチヴァールの心境に達することも可能です。彼の宗教体験の根底にあるのもじつは想像力でした。人間の想像力を過小評価してはなりません。そして想像力こそ、広い意味での芸術（文学・美術・音楽等）が最も得意とする分野です。

震災の報道に触れたとき私の想像力をかき立てた作品を、私の専門（いちおうドイツ中

世文学です）あるいは近接領域からいくつか紹介しましょう。

故郷喪失

故郷喪失や家族喪失による孤独は、ドイツ・ロマン派で好んで取り上げられたテーマでした。ロルツィング（1801-1851年）作曲のオペラ『ウンディーネ』（1845年）第3幕には2人の滑稽な人物が登場し、再会したい人物と再会したくない人物について論じ合うのですが、そこでの歌の冒頭2行を紹介しましょう。

Vater, Mutter, Schwestern, Brüder,

Hab' ich auf der Welt nicht mehr,

… [以下省略]

[第1節の大意] 親も兄弟ももうこの世にはいない。故郷は荒れ果て、知人もいなかろう。彼らの一人でも生きていて再会でできれば何という喜びだろう。

この歌は（ドイツでは）有名ですから、冒頭の1行で検索すれば、省略してある歌詞もわかりますし歌も聴けます。歌詞の理解には接続法第二式の知識が必要ですが、辞書を引けば見当はつくでしょう。ちなみに2行目のHab'はhabeです。

実は第2節には再会したくない人物としてツケが溜まっている酒場の親父が登場し、この歌には滑稽な内容も含まれます。しかし震災直後、たまたまりヒアルト・タウバー（1891-1948年）による録音でこれを聞いた

ときは、胸をつかれました。

タウバーは間違いなく 20 世紀前半を代表するドイツ語圏の大テノールであり、モノクルにトップハットでほほえむ姿は、まさに陽気なオペレッタの帝王です。しかし彼はユダヤ人でした。ナチの時代には彼の赫々たる名声もなんの役にも立ちません。彼はドイツを退去して、オーストリアからイギリスに逃れました。キャリアの絶頂期に活躍の場から追いやられ異郷に生きざるをえなかったタウバーの無念を想像すると、彼が歌うこの滑稽な歌にも独特の哀感がにじみます。

私の知人は、実家が津波に吞まれて故郷もろとも消滅し、最も近い親戚が犠牲になりました。おまけに福島原発のそばなので現地には行けず、被害の実態は許可を得た取材者による映像で知るほかはなかったそうです。幸いなことに配偶者や子どもはこちらにいて無事でしたが、津波と原発に二重に奪われた故郷と親戚。痛ましいかぎりです。

すべてが滅んだ後の希望

中世の北欧には、この世を支えている神々が滅びるという考えがありました。すなわち「神々のたそがれ」です。そこにはロキの子どもたちが大いに関わります。

ロキは神々の一員でありながら女巨人との間に、怪物オオカミ、大蛇、死の女神という 3 人 (?) の子どもをもうけました。彼らは邪悪な存在であり、神々の長のオーズンは大蛇は深海に死の女神はヨミの国に投げ込みました。ところが怪物オオカミだけは飼うこと

にします。「カワイイ」という感じではなかったでしょうから、オオカミを甘く見てからかってやろうという気があったのかもしれませんが。あるいは、近くに置いて見張ろうという気があったのかもしれませんが。ところが、次第に凶暴さをましてゆく怪物を見て神々はあわて、オオカミを鎖で縛ることにやっと成功しました。

神々がたそがれるとき、中世のアイスランド人たちが想像した最も恐れた忌まわしいことがらが続けさまに起きます。夏が来ないで冬が続くうちに戦いが起こり、家族で殺し合います。一頭のオオカミが太陽を呑み別の一頭が月を掴まえ、星は天から消え大地は揺るぎ、木々は倒れ山は崩れます。怪物たちが暴れ回る中、鎖を断ち切った怪物オオカミは天と地に触れるほど大きく口を開けて神々の長を呑み込み、炎の中で世界は滅びます。しかしやがて世界は美しく再建されます。これがキリスト教の影響なのか土着の信仰なのか意見が分かれますが、北欧の神話では神々が滅んでも人間たちは希望を失いません。

10 メートルを超える高さから襲いかかる津波に上あごが天に届く怪物オオカミのイメージが重なりますし、この怪物の飼育に原発の危険軽視を読み取ることができるかもしれません。家族間の争いが世界の終末のしるしになっていることは、現代人である私たちにも十分理解できるでしょう。神話は生きているのです。

大切なのはなんでしょう

本日の授業に疑問をお持ちの諸君も多いと思われる。教員はシラバス以外の内容を授業中に話してよいのでしょうか。一部ドイツ語の授業らしく見せかけた部分もありますが、本日の内容はシラバスから大きく外れていません。そもそも教員は、学問以外を教壇から皆さんに話してよいのでしょうか。もちろん、これとはまったく別の疑問もあります。すなわち、話だけでは被災者の皆さんの役に立ちません。このような非常事態になぜ授業をしているのですか。ただちに被災地にボランティアで駆けつけなさい、等々。

おっしゃるとおりです。皆さんの疑問はもっともです。しかし、もし同じ状況であれば（もちろん震災が繰り返されることを願っているわけではありませんよ、念のため）、私は今日と同じ内容の授業をするでしょう。この世にはシラバスより大切なことがあるはず。その一つが、他人の苦しみに対する思いやりであり、それを可能にする想像力です。人間にはさまざまなタイプがありますから震災への対応もさまざまであり、何をなすべきか迷うのは当然ですが、この一点を忘れなければ大きな間違いはありません。迷いは熟慮に変わり、熟慮は行動の質を高めます。

個としての人間はあんがい弱いものです。一概には申せませんが、故郷や家族は皆さんの確実な支えです。もちろん、これらが煩わしい過去のものであると感じる人もいらっしゃるでしょう。しかし想像してください。これから皆さんは誰かを好きになって新しい家

族を作り、新しい故郷を持つではありませんか。未来を作る可能性は皆さんに開かれているのです。

そして想像してください。苦しみはすぐに終わるでしょうか。早期の復興を心から祈りますが、このような大災害からの復興が一朝一夕にしてなると思えません。持続的な努力が求められるはず。さらに想像してください。自然災害ばかりではありません。戦争や非人道的行為により、苦しんでいる人びとは世界に少なくないのです。もちろん想像だけではだめで事実の裏付けが必要ですが、ときには人びとの苦しみについて時空間を越えて皆さんの想像力を解き放たらいかがでしょう。

そんなことを考えて、きょうはこのようなお話をしました。それでは終わりにします。来週はいつもの授業です。

きょう取り上げた作品の二つには邦訳がありますので紹介します。また音楽に興味のある方には、ワーグナーの諸作品も参考になるでしょう。

・ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ（加倉井他訳）『パルチヴァール』郁文堂、1974年（再版もあります）

・谷口幸男訳『エッダ — 古代北欧歌謡集』新潮社、2002年

ツナミのように

早稲田大学文学学術院教授 小林 茂

3月11日は家に居た。静かに晴れた午後だった。

かつて体験したことのない激しく長い揺れのおさまるのを、妻と二人でただ待った。

ただちにテレビを点けて、情報を得ようとした。そのあと、目にすることになった映像は、誰もが同じように記憶しているだろう。穏やかな午後の陽光の下で、波は田畑を呑みこみ、家々を押しつぶし、押し流していた。

その夜の交通と通信の混乱も、誰もが経験したことだ。

その次の朝には、早くもフランスの友人たちから、言葉が届けられた。

初めはメールで、少し遅れては、手紙も来た。電話をくれた知人もいた。

阪神淡路の地震の時のことを思い出す。あの年の春、わたしはパリ大学に属する国際大学都市の日本館を預かっていた。災害が伝えられると、職務室に電話とファックスで、同僚たち——他の館の責任者たち、本部の代表や役員たち——から連絡が来る。君や君の周りの人たち、館の学生たちで、縁者が被害を受けた人はいないだろうか。心配している。私たちは君とともにある。こういう言葉の数々。心を寄せるとは、こういうことだろう。そして、今また同じ言葉。

言葉が人を結びつけ、力になる。

私たちは君とともにある。日本語に訳せば、そうなる。しかしこれは日本語にはない表現

だ。私と君とは別個だからこそ、ともにあることが出来る。日本語では、そして日本では、どうやら私と君は境目がなくつながっていることが求められる。

連絡の中には、原子力発電所の状況について、尋ねてくるものもあった。君たちは、被害を蒙ってはいないのか。原子炉は確実にコントロールされているのか。

十六年前と違うのは、映像も含めて、情報は直ちに世界に届いていたことである。ツナミの映像は、誰でもが見ていた。破壊された原子力発電所の姿も、誰でもが見ていた。それなのに、状況を明らかにする情報は、どこからも提示されてこなかった。尋ねてくる遠い友人にも、伝えられるのは、状況は安全であると発表されているということでは、なかった。不確実な状況把握しかできないまま、何のよりどころもない私たち自身が、不安の中にあつた。そこに問を投げられたとき、知らされていることは何もない、それだから大丈夫なのだろうと、不器用に答えるしかなかった。答えられない問を投げかけられて、わたしは不機嫌になった。

少しずつ状況はわかって来た。海外からの問い合わせが、いかに的を得たものであつたかがわかってきた。この国は少しも変わってはいないと認めて、私は不機嫌になった。

この国の言葉は、変わっていない。

この国の言葉は、情動だけを伝える。

事実を正しく捉えること、言葉がロゴスであることは、この国では許されない。

許されるのは、パトスの言葉、それも、免

責を与えてくれるパトスの言葉だけである。

困難が目の前にある時、使ってよい言葉は、ダイジョウブの一言だけである。ダイジョウブと言わない者は排斥される。

放射性物質で汚染された土地の中には、十年二十年人の住めないところが出てくるかもしれないと、誰かが言った。当たり前のことだろう。途端に非難の声が上がる。関係者を悲しませるようなことを言うのは、情け知らずだという。人として許せないのだそうだ。

汚染された土地で生産された食糧は、摂取しない方がよいと、言う者があった。当たり前のことだろう。またしても非難の声が上がる。生産者の気持ちを傷つける。人でなしの発言だという。

事実を把握し、理解することは、誰も望まない。ダイジョウブと言わないから非難される。人として認められない。人格に問題がある。聞き覚えのある言葉だ。

ダイジョウブと言わないものは、非国民である。日本人は非国民になりたがらない。

ロゴスの言葉をもって考える者は、非国民となる。

非難の大合唱の中で政府が崩壊したのは、何よりも、ロゴスの言葉によって、原子力発電所廃止の方向が定まることを恐れた連中に、パトスの言葉しか用いないメディアが同調したからに他ならない。

そしてそれはいかにも言葉の問題に他ならない。私と君とをひとつなぎに糊づけして、どこにも責任のない、ダイジョウブの呪文の下に潜り込む情動が、この国の言葉なのだ。

この国では、国民の利益ではなく、責任のある者の責任隠ぺいのために言葉は用いられる。

言葉は正しく用いなくてはならない道具である。しかしこの国では、言葉にその働きは禁じられている。

言葉はまた、使われることによって同時に、用いる者を、操ってしまおう。その力は、言葉にとってあまりにも根源的だから、この国においてさえ、常に働く。

言葉のもつ、この二重の性格を認識しなくてはならない。

その認識はないままに、ダイジョウブが生まれて、君と私のひとつながりの、形ない、無責任なパトスの地続きが、この国を呑みこんでいく。ツナミのように。

私たちは君とともにある、そう伝えてくれた友人たちに、改めて、何と言えば良いのか。私と君が癒着して、ロゴスによっては何も見ようとせず、パトスによってひと固まりに温め合っている個以前の人々の国から。

避難民

東京大学名誉教授
早稲田大学国際言語文化研究所招聘研究員
長尾 龍一

震災の報道の中で、ときどき「避難民」という言葉を見かけた。Googleを見ると「避難者」というウェブサイトが9月現在360万、「避難民」は130万である。この「避難民」

という言葉には、私のような者には痛切な記憶を呼び起こすものがある。

昔中国の東北部に「満州国」という国家があり、終戦時 3000 万の中国人等の他に、200 万以上の日本人が住んでいた。そのうちの数十万は「関東軍」と呼ばれる軍隊で、彼らは昭和の初め、時の内閣を出し抜いて、東北三省とよばれる中国の東北地域を占領し、「満州国」という国家を作り、「王道楽土」と宣伝して大勢の国民を呼び込んだ。ところが対米戦が不利となり、東南アジアの日本軍が危機に陥ると、この関東軍の主力は次々に南方に投入され、軍事的に殆どもぬけの状態となっていた。

1945 年 5 月、ヨーロッパ戦線でドイツが壊滅すると、ソ連は大軍を極東に移動させ、日ソ中立条約を破って 8 月 8 日の宣戦布告とともに満州に進撃した。軍事的には問題にならず、関東軍はほどなく降伏したのだが、ソ連は彼らをシベリアに連行して、奴隷として使役した。

残された一般日本人住民は、本国との連絡を絶たれ、俘虜となった。スターリンと宋子文が締結した協定によれば、ソ連軍は日本降伏後三カ月間満州に留まることになっていたが、結局翌年五月まで居座った。当時の満州の状況は、法的には中国の主権下で、ソ連が施政権を行使するという状態であったと思われる。ソ連軍が撤退すると、潜在的であった中国の主権が顕在化し、その主権をめぐる国府軍と共産軍が争うことになる。

この日本人にも、おおまかに分けて二種類

があった。第一種は、満鉄沿線の大都市に住み、敗れたとはいえ、大勢の日本人とともに、ある程度組織的に行動し得た人々で、第二種がそうでない、後に「棄民」とよばれたような人々である。特に開拓団の人々は、無防備状態で、ソ連軍からも中国人からも襲撃された。「開拓地」として彼らに与えられたものが、実は関東軍が先住の中国人農民から奪った、あるいは二束三文で買い叩いたもので、怨まれていた、というようなこともある。

後者の人々は、着の身着のまま、満鉄沿線への逃避行を余儀なくされた。しかも男たちの大部分は徴兵されており、多くは老人・女性・子供の集団であった。子供を殺す母親、また貞操を奪われて自殺する女性など、体験者たちが「生き地獄」と形容する状況が随処に現出した。引揚げ船が博多港に着くごとに、九大病院産婦人科の医師たちが昼夜動員されて中絶手術に当たった、という話を当事者から聞いたことがある。

大都市居留民たちは、こうして辛うじて満鉄沿線に辿りついた人々を、「避難民」と呼んだのである。前者が後者にどのような態度をとったかの全体像を描き出すことは、難しい。

敗戦直後、長春日本人社会の要人たちは、事態に対応するために「日本人会」を結成、(政府関係者には逮捕の危険があるため) 満州重工業社長高碕達之助氏をその会長とした。資産や工業施設を根こそぎ掠奪することを企図したソ連にとって、取り外しや輸送のためにも、満鉄等日本人の協力が必要であったから、「交渉」ということも一応成立したのであ

る。高崎氏は「少なくとも長春においては、彼等の手で日本人が殺害された事件は起らなかった」と言っている（『満州の終焉』215頁）。この「交渉」によって、ソ連兵の乱行を「掠奪」の限度にとどめた、というのであろう。

この「日本人会」は、横浜正金銀行・三井・三菱・住友などの現地責任者を保証人とし、「帰国後日本政府と交渉して返済するよう努力する」という約束の下で、企業等から8億8000万円を集め、避難民等の救済資金とした（実際後に日本政府は、その債務を支払った）。「会」は、ソ連軍や中国人に占拠されなかった建物を避難所として提供し、食糧・衣服・燃料などをこの資金で供給したが、ソ連軍が濫発した軍票によるインフレなどあって、もとより不十分であった。

大都市に辿りついた避難民たちは、知人・同郷人などに頼ろうとした。私の身近にも同居家族のようにして過ごした人々もある。長春で洋服店を営んでいた津田徳治氏は、「虎穴に入らざれば」とソ連軍と交渉し、ソ連兵の洋服を作ることになり、同郷の岩手県人の避難民を、管理下のビルに住ませ、仕事に雇って養った（『満州十二年』131～5頁）。遠藤誉氏の父君大久保宅次氏なども、経営する製菓会社の建物を避難民の「寮」にして、仕事を与えて給与を払った（『チャーズ』(上)40・50頁）。

しかし、こうしたことが一般的であったとも思われない。何より人々を避難民から避けさせたのは、発疹チフスの恐怖である。私は「国民学校一年生」で終戦を迎え、翌年七月

に引き揚げて来たから、一年近くを敗戦の満州で過ごした。学校は敗戦とともに無くなったが、子供たちの教育も必要であるということで、「桜塾」という塾が開かれた。満州国軍の獣医少将とかいう小野さんの家が終戦と同時に空き家になり、そこにオルガンなどを持ち込み、郵便局員などが俄か先生になって、子供に教科を教えた。シェークスピア学者小田島雄志先生の「私の履歴書」によれば、長春の都心では、「塾」で旧制一高や建国大学の教授たちが国語・数学・理科を教えた（日経2011年7月4日）。こんな高級なものとはほど遠いが、これは都心と郊外の差であろう。

ところで、子供たちには知らされなかったが、この塾に避難民の子供を入れるか否かをめぐって、深刻な対立があったようである。集団墓地への通路にあった私たちの（母子家庭の私たちが同居させて頂いた（商業学校教諭）古賀重利先生の）家の前を、毎日避難民の死骸を運ぶ人々が見られ、筵から足が垂れ下っていることもあった。「避難民集団に発疹チフスその他の病気が流行していて、塾の子供たちに伝染しては困る」という消極論があったことは想像がつく。どういう経緯か、避難民の子供が一人入ってきたが、ある日集団リンチを受けた。

私は塾をやめさせられた。それから二年くらい後、父はまだシベリア抑留中で、母と私は父の故郷である九州の山村にいた。父の満州時代の友人で、当時大分県の要職についていた近田さんという人がこの村に視察に来るということで、母は耶馬溪鉄道守実（もりざ

ね) 駅に挨拶に行った。ところが近田氏は出会いがしらに、挨拶もせず、「あんたは避難民の子が入ったというので、子供を塾からやめさせたじゃないか。それでも日本人か」と、大勢の人の前で面罵したという。母は「だってお世話になっている古賀先生のご一家に病気をもち込んだら申し訳ないから」と言っていたが。

そして都市居留民にも避難民にも、帰国してみれば日本の現実がある。

「千円乞食と誰がつけしか引揚者に日本はいたく冷たかりけり」(松本真智子) [引揚者一人に千円ずつ支給されたのである]

「引揚者を甘やかすなど書かれたる記事あり頬を打たれし思ひす」(臼井敦子) (『昭和万葉集』(七) 八三・四頁)

3月11日の夜、陸前高田第一中学校の避難所では、被災者1200人が飢えと寒さに震えていた。その頃、隣の住田町婦人消防協力隊の高橋修子隊長(58)は、停電で真っ暗な町内を走り回り、炊き出しの人手を集めた。翌12日午前6時、同隊員や町職員ら50人が保健福祉センターに集合、六千個のおにぎりを作り、町職員が山道をかき分けて陸前高田市に届けた。更に職員が寺院を回って集めた蝋燭、町内の商店からかき集めた粉ミルクなど多様な物資を届け、それでも足りなければ職員がなげなしのガソリンで遠野市や奥州市で買い出しをした。住田町の人口は6200人、職員は100人だという(『岩手日報』8月23日)。

その二週間後、ニューヨーク・タイムズ記

者マイケル・ワインズ氏がこの避難所を訪れたが、そこは信じられないようなユートピアであった。コソ泥も争いもなく、被災者の歯科医は無料で治療し、床屋は無料で散髪をする。携帯電話も充電でき、手の消毒も行き届き、マスクもスリッパも配られている。自衛隊が設けた架設風呂にはシャトルバスで通える。日本的効率性の小宇宙がここに実現している、と(Herald Tribune 3/28/2011)。

敵意ある外国権力、敵意ある民衆に囲まれ、内輪もめや密告合戦を展開した満州やシベリアの戦後日本人に比べると、戦後二世代の平和の下での日本人は、巨大なカタストロフィーの下でも、安定した社会秩序への信頼を失っていない、というのが私の感想である。福島の人や物について、放射能を恐れて避ける心なき人々もいるが。

東日本大震災と情報

早稲田大学大学院社会科学研究所博士課程
梅宮 小百合

東日本大震災では、多くの情報が飛び交った。たくさんの情報が飛び交う中で、「隠蔽だ」と叫ぶ人がいる一方で、政府がソーシャルメディアを使い、今までに無い情報の渦が私たちを襲った。東日本大震災における情報について以下に考察していきたい。

情報に対する考え方は大きく二つに分類出来る。一つは情報の透明性であり、もう一つは情報の信頼性である。情報の透明性は、民

主主義の成熟とともに希求されるようになるものである。Wikileaksなどは、情報の透明性に重点を置くものとして評価されている。そして、一方の情報の信頼性は、報道機関が担ってきた。その役割は、世の中にあふれる情報を整理し、編集し、ときに分析を加えて世の中に発信するということである。このように、情報には以上の二つの考え方がある。

それでは、今回の東日本大震災をめぐる情報にはどんな批判があったらうか。

情報の透明性に立った場合、「隠蔽」に対する批判が生じる。今回は SPEEDI の公開が遅れたことなどから「政府が情報を隠している」という疑心が国民の間で芽生える結果になってしまった。これは、情報の透明性が担保されていないことへの不満から出てきた感情であらう。

一方、情報の信頼性に立った場合、「デマ」が横行していることに対して批判が生じる。今回はインターネット上を中心に、デマや流言が拡散された。本来、情報の信頼性を担うべきである報道機関も、非常時のため、うまく機能しなかったという背景もあるであらう。

以上のことから考察すると、情報の透明性に対する批判の矛先は政府、行政機関に向けられるべきであり、情報の信頼性に対する批判の矛先は報道機関に向けられるべきである。この点を混せて批判すると、不毛な議論になってしまうのではないだろうか。

そして、3.11 の情報に関する問題は、政府の情報に透明性が無く、報道機関の情報に信頼性がなかったということである。

政府情報は、あまねく伝わったとはいいたいし、適切な時期に適切な情報が流れたとは考えがたい。先に指摘した SPEEDI もそうであるし、記者会見の映像も民放で流れる回数はかなり減った。もちろん、インターネットにおいて、動画公開や Facebook、twitter などを通じて情報を発信してはいるのであるが、インターネットにある情報にすべての人がアクセスできるわけではない。透明性を高めながら、より多くの人に情報を行き渡らせることが今後の課題になってくるであらう。

大手メディアなどの報道機関についても、信頼性をうまく生かしていたとはいいたいのではないだろうか。特に震災初期に、専門家の言葉をそのまま流し、解釈を付け加えなかったことは大きな問題であったらう。情報の信頼性を確立していくためには、ジャーナリストの役割の一つである、情報を編集し、分かりやすい形で受け手に伝えるという考えが欠けていたのではないだろうか。

また、7 月初旬に明らかになった松本龍復興担当大臣の村井宮城県知事に対する発言問題などから、市民の報道機関に対する不信が募っている。これらも、情報の信頼性が損なわれている要因になっているであらう。一方、インターネットの普及により、情報のソースが報道機関だけではなくなった。有力な個人や、ニッチの情報を集めるニュースサイトも報道機関並の力を持つようになった。自分が信頼する情報を報道機関や政府にだけ求めなくなっているのである。

以上で見てきた通り、情報の透明性と信頼

性に関して、東日本大震災ではそれぞれの役割が上手く機能しなかった部分が多かった。

ここまで見てきた情報の透明性と信頼性というのは相反するものではなく、相互に補完し合うものである。情報の透明性は、情報の洪水をもたらす。何でも公開する、ということは情報が氾濫するということである。そんなときには、情報を編集する役割、そして情報を解釈する役割が非常に重要になる。今後、報道機関の役割は情報の選別と分析を中心とした物になるだろう。

政府発表の情報を、国民全員がそのまま見て理解出来るとは思えないし、記者会見などの映像を、すべて通して視聴するほど時間に余裕のある個人はそう多くは無いだろう。だからこそ、報道機関を信頼し、編集、解釈を信託出来るように、報道機関も自身の信頼性を回復していかなければならない。

東日本大震災を通して、情報の流れが次世代型に移行していることがあらわになったのではないだろうか。この先、旧来型の情報の流れでは批判が起こるであろう。今後、政府報道と報道機関のあり方は大きく変化していくだろう。

<参考文献>

- キム、ジョン (2011) 『逆パノプティコン社会の到来』デイスカヴァー携書
「東日本大震災ドキュメント 23日」朝日新聞朝刊 6面 (2011, 3月24日)
「松本復興相、被災地で放言 知恵出さないやつは助けない・何市がどこの県か分からない」朝日新聞朝刊 4面 (2011, 7月4日)

科学技術という迷信—東日本大震災の原発事故に関する感想

早稲田大学大学院社会科学研究所修士課程
劉 婧

背景

2011年3月11日14時46分、日本宮城県牡鹿半島沖を震源として、日本の観測史上最大のマグニチュード (Mw) 9.0の地震が発生した⁽¹⁾。地震と津波による被害を受けた東京電力福島第一原子力発電所では、全電源を喪失して原子炉を冷却できなくなり、大量の放射性物質の放出を伴う重大な原子力事故に発展した。これにより、周辺一帯の住民は長期の避難を強いられている⁽²⁾。

地震体験

2011年の3月11日、東日本大震災が起こった時、私は東京にいた。

その日は暖かい春日だった。私はほした布団をベランダからしまって、昼寝しようとした。一緒に住んでいる友たちが洗濯物を干していた。私がつらそうとしているところ、急に部屋が揺れ始めた。友たちがすぐベランダから部屋に戻って、「地震だ」と言った。

日本へきてから三年間、よく東京都に地震があった。日常茶飯事とは言えないが、もう小さな地震に慣れてしまった。しかし、今度は違う。5秒ぐらい経っても揺れが全然弱くならず、逆に強くなった。マンションの隣に住んでいる日本人の方が、ドアを開けて階段を降りた声が聞こえ、私と友たちもお金を持

ち、マンションから出た。道で5、6人が一緒に立っており、みんな頭をあげて、強く揺れている電柱を見ていた。周りの一戸建ての中から、物を落ちた音と子供の泣き声が伝わってきた。私は緊張しながら、頭の中でいろいろなことを考えていた。

「静まったらまず国の両親に電話しよう…」
「食べ物と水を買わないと…」
「一番近い避難所はどこだっけ?」。考えているうちに、周りは静かになった。私と友たちが部屋に戻って、貴重品と携帯を持ち、すぐ駅の近くのスーパーに行ったが、駅もスーパーも閉じていた。携帯で両親と東京にいる友たちに連絡しようと思ったが、通じなかった。結局、私たちは百円ショップでインスタントラーメンをいっぱい買って、家に戻った。

幸いなことに、インターネットが通じていた。ネットで両親と連絡し、状況を説明した後、両親も少し安心した。その後 YAHOO で調べたら、東北地方で大きな地震が起きたことが分かった。防振用のバッグを手もとにおいて、友たちと一晩中しゃべっていた。とっても不安だったが、友たちも私もその時、帰国はまったく考えなかった。

原発のパニック

翌日の午後、インターネットで福島第一原発の1号機が爆発したニュースがインターネットで流れた。このニュースが放送されてから、私も国の両親もパニックになった。地震の一瞬の破壊力より、原発は長期間にわたって続く影響がある。そして、当時の状況で、

その影響の程度と範囲はまだ判断できなかった。原子力というものに対して、未知の部分が多く、その破壊力も予測できない。

その日、私と友たちが帰国を決め、15日発のチケットを買った。14日の午前中、成田に着いたが、原発の問題はまだ続いていた。15日の飛行機を待ち、空港で徹夜した。

原子力の功罪

もともと今回の原発事故に対し、私は深く考えていなかった。しかし、今学期のゼミでみんなの発表を聞いてから、私も原子力の問題について真剣に考えるようになった。

原子力という技術の応用は、現代科学技術を代表するハイテクの一つである。特にエネルギーが乏しく、温暖化問題がますます深刻になってきた現代では、原子力発電所の存在は、その問題を完璧に解決できる。温暖化の問題を避けられ、十分なエネルギーも保てる。人類は自分の知恵に喜んでいたはずだ。

しかし、25年前チェルノブイリの原発事故が発生した。そして、25年後、福島第一原発でも同じ7ランクの事故が起きた。両方とも幅広い地域に、数多くの人々に、長期間の未知の影響を与えている。確かに今は、原発事故がどの程度人々の健康に影響するのはまだ分らないが、しかし、分らないこと自体が一番恐ろしいことではないか。それが、私と友だちが帰国した理由であった。

今回の原発事故を別にしても、原子力の発明と使用は、もともと怖いことだと思う。原子炉の使用を容認している人々は、もう広島

と長崎の泣き声が聞こえないのだろう。

今日の新聞や学界で、「原子力は正しい使用をしたら良い」と主張する人が決して少なくない。しかし、「正しい」使用方法とはなんだろうか？日本とロシアの原子炉は、正しく使われていたというのが、事故が起きた。しかも、その後、有効な対策が立てられていない。人間がコントロールできない事態になってしまった。

少し過激な考え方もかもしれないが、今まで私が知っている限り、軍事に応用していない科学技術は、極めて少ない。原子力が軍事に応用されないのは想像できないことだと思う。確かにこの何十年間、世界が相対的に平和であり、核兵器も大規模戦争もないが、しかし、それは永遠に続くこととは言えない。もしこれらの技術を軍事に応用したとら、人類はその結末に責任を取れるのだろうか。

科学技術という迷信

聖書にバベルの塔の神話があった。ノアの洪水の後、人間はみな、同じ言葉と話していた。人間は石の代わりにレンガをつくり、漆喰の代わりにアスファルトを手に入れた。こうした技術の進歩は人間を傲慢にしていって、そして、天まで届く塔のある町を建てようとしたのである。神は、人間の傲慢な企てを知り、怒った。そして人間の言葉を混乱させた。今日、世界中に多様な言葉が存在するのは、バベルの塔を建てようとした人間の傲慢を、神が裁いた結果なのである^③。

今日の人間の状況は、この神話に似ており、

科学技術を自慢し、科学が進歩したらすべての問題を解決できると信じている。東京都知事の石原慎太郎は、東日本大震災に関して、「天罰」と言った。しかし、世界中の人々はそのように思っていない。ただの事故だと思っている。

今回の原発事故は、神が人間に下した「天罰」かどうか、私には分からない。しかし、バベルの塔の神話と同じく、人間が科学技術の発展で傲慢になり、世界を自分の思いのままに変えようと望んでいることは確かだ。科学技術は確かに人類の生存方式を大きく変え、現代生活もかなり便利になった。しかし、それは人間を幸せにすることとは違う。

小泉八雲は素朴な日本が好きだった。夏目漱石も当時のイギリスのような「文明社会」に適応できなかった。その原因は、彼らが科学発展がもたらした近代文明が「幸せ」ではないことが分かっていたのだろうか。

中国の哲学者の老子も「道德経」で、「無為」の思想を主張した。つまり、人工の力・技術で生存環境を変えるのではなく、自然界の万物と同じ、天が定めた生き方で生存するのは、人類という生物が長く生存できる道である^④。

近代になって、老子の思想は消極的であり、社会を退化される思想と見なされている。しかし、今回の原発事故でその評価を変えるべきではないか？人間が技術や科学の習得や応用について、そろそろ反省すべきではないか？

なぜ現代化や科学技術は進化だと断言できるのか？なぜ原子力発電が必要なのか？地球

が負えないほどのエネルギーを求めるのは、人間の貪欲ではないか？原子力などの科学技術は、本当に人間を幸せにするのか？そうだったら、なぜ今の世界が原爆の闇に覆われているのか？そうではないなら、その力を手に入れるのは何の意味があるか？

これらの問題を問わず、ひたすら科学技術を信じるのは、科学に対する迷信ではないか？このように科学が究極に発展しても、それは何の意味があるのか？現代の人間はみんな「科学」と言う迷信に己を見失っているではないか？

<注>

- (1) 気象庁、平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震」について(第15報)。
- (2) 電力需給緊急対策本部、「夏期の電力需給対策の骨格(案)」。
- (3) 『旧約聖書』、「創世記」参照
- (4) 李耳・莊周[著] 袁敏[注釈]、『老子・莊子』、「道経」参照

人間の営み

東京大学名誉教授
早稲田大学国際言語文化研究所招聘研究員
西本 晃二

「回帰」:わが国ではそれほど知られてはいないが、僕の専攻しているイタリア文芸・思想の分野で重要な位置を占める、ジョヴァン・バッチスタ・ヴィーコという人物がいる。18世紀前半に南イタリアのナポリ王国で活躍したのだが、その卓抜な才能にもかかわらず、生前は必ずしも十分に報われたとはいえ、不遇をかこった。しかしその主著『新しい学』の第3版(決定版)が、ヴィーコの死の年1844年に死後出版の形で世に問われると、著者の名声は徐々にだが確実に上がり、今日ではヴィーコを近代西ヨーロッパが産んだ最も独創的な思想家と認めない学者はいない。

今回の東北大震災に付随して起った東電福島原子力発電所の事故についての話に、なぜ18世紀イタリアの思想家の名前が出てくるかということ、事故の報せを聞いた途端に「アア、これはヴィーコの言った通りだな」と、思わず独りごちたからだ。『新しい学』には「発展的回帰」という独特な考え方があって、人間の営みは(キリスト教の)神の摂理により最終的には至高善の実現に向って進むが、その過程において三つの段階が螺旋形を描きながら繰り返し回帰してくるとする。

今回の福島原発の事故の報に接した時、「東電は関東軍と同じだ、歴史は繰り返す！」という思いが僕の頭を横切った。関東軍は昭和

20～30年代の、日本の植民帝国主義的発展の一翼を担うという使命感に燃えて、中国は遼寧省の撫順（鉄鉱資源）と鞍山の石炭（エネルギー）を遮二無二確保するという冒険に乗り出し、無茶苦茶な「満州国建国→日中戦争→太平洋戦争→原爆投下による無条件降伏」というコースを突っ走った。しかも「間違ったやり方をしている」という気はまったくなく、300万人の日本人を殺し、近隣諸国に莫大な被害を及ぼし、最後には原爆を落されながら、関東軍の参謀は一人として責任を取ってはいない。

東電の方も、「戦後日本の復興のためのエネルギー生産を担ったのは俺達だ！」という独り善がりの自負を抱き、通産官僚の尻押しもあって、水力→火力→原子力発電とエネルギー生産手段の開発をやみくもに推し進め、それに伴う危険を無視、あるいは知っていても勘定に入れようとしなかった。その冒険が、核爆発で一巻の終りとなったのも似ている。

また今回の事態に東電の責任者の退陣や入れ替えもほとんどなく、関東軍の参謀にあたる「保安院」のメンバーの責任表明も個人的な形での発言でウヤムヤにされた。ケジメをつけるために「保安院」自体を廃止し、別の名称とメンバーの総入れ替えによる新しい組織にすべきだと思うが、これまたなされてはいない。その「絶対安全神話」も、「鬼畜米英撃滅、神国日本必勝」という僕が子供の頃に散々聞かされたスローガンの責任同様、一億総懺悔式の「和をもって尊しとする」わが国の社会の風土のせい、か、「それでは原発以外で、ど

うして国民生活に必要なエネルギーを賄うことができるのか」という議論にすり替えられているような気がする。

原発は、もう廃止する方向で考えるべきだと思われる。それはその危険性とか、社会にもたらす心理的不安といった問題のほか、発電所自体が奉仕している資本主義システムの最高原理である「利潤」の観点からも、そういうことがいえる。

新聞は、まことに象徴的な事態として、資本主義の究極業種ともいえる「保険会社」が、東京電力の掛けようとする損害保険を断る事態が発生しているというニュースを伝えている。むろんこれまでの付き合いがあるから、すぐに全面拒否という方向には進まないだろうが、じつは今後の原発保険契約は免責条項を細かく規定して、事故が起っても保険会社の損にならないように、とはすなわち原発は実質的に無保険の状態に、なるように設定されることになる。この点（とは利潤の観点）からも、原発には問題が多すぎるということになる。

じつは原発は、現在の原子力発電の技術では、核融合によって生ずる熱エネルギーのうち、最大に見積もってもタッタの20%台しか取り出すことが出来ない。こんな効率の悪い内燃機関は余りないだろう。けれどもこれ以上のエネルギーを発生させようとすると、発電機を作っている金属が溶けるし、発電所自体が爆発してしまう。そうさせないためには水を使って発電装置そのものを冷却せざるを得ず、したがって原発は海岸沿いか、フラン

スのロワール河、米加国境を流れるセント・ローレンス河（スリー・マイルズ原発）など大河に面して建設されているのだが、これがまた水温を上げるなど、本来の環境を変え生態系を破壊することにつながる。

また原発には、必然的に施設が老朽化せざるを得ないという難点もある。誰でも知っていることだが、電力を生み出すタービンを廻す核融合エネルギーは放射能をも発生させ、それによって汚染された物質を原発の外に取り出すことは危険きわまりない。とすると、ある程度の期間使用され耐用年限が近付いても、その発電機を交換すること自体が不可能になる。しかも新しい発電所の設置には、用地の取得から建物の建設、新発電機の購入といった多大の費用を要するから、電力会社としてはギリギリまで既存の老朽化した施設を利用することになる。

それでもいつかは耐用年限を越した発電機を始末せねばならぬ時が来る。そこですでに1972年、放射能に汚染された物質の海底投棄を禁ずるロンドン条約が策定されつつあった時点で、アメリカ政府がわが国に、使用済みになった原子炉についての例外規定を盛り込むよう働きかけた事実の報道がされている。

廃炉ばかりでなく、使用済みの核燃料棒、さらには今回多量に発生した汚染された表土から乾草や家屋の廃材まで、これをどう保管し処理出来るのか、費用も時間もサッパリ見当も付かない。こんな施設に、「現在のエネルギー需要に應えるため」という短期的な視野から、いまだにしがみつくとのは、かつて古い

ぼれた毛沢東が「大躍進」と称して全国の木を切って銑鉄の生産を増強させ、一時は効果があったかにみえたが、その結果中国各地で洪水や砂漠化が進み、今もその傷跡が残っているのと同じで、なすべきことではない。

「限界」：そこで原子力発電に代わるエネルギー供給の手段として、火力の他に伝統的な水力、さらに風力、太陽熱、潮汐など自然力の利用による発電手段に関する議論が盛んになってきている。だがそうしたエネルギー供給の方法を考えるのと一緒に、迂遠と思われるかも知れぬが、地球の「限界」を考えてみる必要はないだろうか。

「ビッグ・バン」から始まった宇宙の生成（それ以前のことは、人間の限界ある認識能力の彼方にある）、その中での我々の銀河系の誕生。始まったものにはまた、必ず終りがある。石油の埋蔵量にしても限りがあるのは知られている。地球の中心にあるマグマも何時かは冷える時が来る。しかも現在、日本を始めいわゆる「先進国」で、全世界のエネルギー消費量の8割近くを占めている。これではバランスに欠けるといわれても仕方ない。

さらなる可能性を追求するために宇宙へ出掛けて行くことを主張する意見もある。しかし人間が生存するには、エネルギー代謝を行なうために必要な酸素の存在ばかりか、空気中のその濃度、気圧が1気圧で気温が摂氏4—30度、1日の長さが24時間などなどの基本的条件が揃わなければならない。こんな条件を満たす星が、太陽系の惑星であれ恒星であれ、はたしてあるのだろうか？なければ強

化プラスチック・ドームを建設して、宇宙にミニ地球をバラ撒き、その中でまた地球と同じ生活条件下で権力争いをやらかすのだろうか？

「道具」を開発して自己の認識能力を無限に拡大することが出来るという、西欧ルネッサンスに生まれ、デカルトを経て産業革命に到る、じつに臆面もなければ正当な根拠もない人間中心主義は、アインシュタインの相対性理論に代表される「光速より早い物はない」という信仰に立脚する「科学教」という新宗教にも限界があることが気付かれ始めた今、ソロソロ見直される時期に来ているのではなからうか。

ついでに現行の電力会社の地域独占事業形態も、地方分権強化の建前からしても廃止されるべきだろう。電力供給は公共性のある事業だから、地方自治体が料金の設定に関わる形で、地域の事情に応じて複数の電力会社が競争するのが望ましいと思う。いったん上がった生活水準を抑えるのは至難のわざである。

だが、今からホンの60年前、終戦直後の物資不足と混乱の状況を思い起こせば、わが国、ひいては地球全体、それも人間ばかりか全ての生物・非生物を含み、かつ何時かは尽きる地球全体の「より好い生存のために」、自己の限界を意識し、それを通して自己以外の存在の限界にも配慮した生の営み方を考える必要があると思われる。

関係性の回復へ向けて

早稲田大学名誉教授
早稲田大学国際言語文化研究所招聘研究員
照屋 佳男

戦争と大震災

3月11日の「国内観測史上最大の巨大地震」に発する東日本大震災は、先の戦争と重ね合わせて語られることが多い。たしかに大地震と大津波で壊滅状態になった東北の市町村は、終戦直後の廃墟と化した我が国の諸都市との比較を誘うところがある。

死者1万5781人、行方不明者4086人、避難者8万2945人（8月15日現在）という数字も戦争との比較を誘う。たしかに人的・物的被害の甚大さは、戦争に劣らぬ破壊力を思わせた。

「言葉を失うほどの惨状」を呈している街、宮城県気仙沼市について、地震・津波発生時に現地に行った一新聞記者の表現「泥の海に沈んだ街から炎が上がり、住民はぼう然と立ちつくすしかなかった」（『読売新聞』3月12日朝刊）は、戦争の破壊力を目の当たりにした者の言葉かと紛うばかりの表現である。

しかし今回の大震災と戦争との類似は、人的・物的次元における被害の類似に留まらない。

「当たり前」の消失

東日本大震災に触れて「当たり前」の毎日に感謝して生きる事」と書いた高校生がいる

『人権メッセージ集 —— 高校生からのメッセージ』東京都人権啓発活動ネットワーク協議会 平成23年9月17頁)。「当たり前の毎日」の消失という点でも、大震災と戦争とは類似しているといわなければならない。

「当たり前の毎日」が失われるとは関係 —— 家族をはじめとする人との関係、社会(共同体)との関係、自然(動植物、大気、土壌、水)との関係、仕事との関係 —— が失われるということ、とりわけ人と人との間に起こる関係の断絶は戦争との類似を際立たせる。次の叙述に示されている人と人との間の関係の断絶は、まさしく戦争の属性でもある。

「津波は公民館2階の天井まで達した。外では濁流の中で木の切れ端にしがみつ、『おい、助けてくれ!』と必死に叫ぶ男性がいる。だが、濁流が一面を埋め尽くし、助けに行ける人は誰もいない」(『読売新聞』3月12日朝刊)。

このような関係断絶を嘆き悲しむのではなく、むしろこれを肯定的に捉えるところに生存上意義深いものが見出されるとする説もある。

新聞は「津波から身を守る方法」として「てんでんこ」を取り上げてこう解説している(『読売新聞』3月28日夕刊)。「てんでんこ」、すなわち「家族の居場所を確認し合う行動こそが危険」である、親子であっても気を使っではいけない、「一人ひとりがてんでんばらばらになっても早く高台へ行[く]」こと、「自分一人で避難すること」が最優先されなければならないということを意味している「てんで

んこ」によって多くの命が救われるのである、と。「てんでんこ」は家族が「互いに『必ず避難してくれている』と信じ合う」ことを前提にしているとも解説されているが、この前提は覚束ない。家族再会の保証はどこにもない、むしろ関係断絶の永続化の可能性の方が高いかも知れない。「当たり前の毎日」を消失させる非日常的時間に領された緊急事態が過ぎ去った後、関係断絶の永続化の引き起こす極度の精神的窮乏状態からどうやって脱け出すかという問題が厳然として残ることになる。

関係性の回復

関係断絶の永続化から生じる精神的窮乏状態は、物質的窮乏状態と同程度に、あるいはそれ以上に耐えがたいものである。「両親と離ればなれになったままの子どもたち」の陥っている精神的窮乏状態が痛いほどよく分かる記事(『読売新聞』3月17日朝刊)に登場する子どもたち、「『家族が見ていてくれたら、自分がここにいることを知らせたい』と願いを込めてカメラ[テレビカメラ]を見つめる」中学生たちの顔に浮かぶ表情は見る者の胸に深く刻印される。

大震災からの復旧・復興のエネルギーが物質的窮乏状態の解消に主として向けられ、精神的窮乏状態の解消は二義的なものとして扱われているように思われる。が、物質的領域での復旧・復興の優先は東日本大震災を急速に風化させる働きをするだろう。

仮設住宅は復旧・復興のシンボリック役割を担わされているが、仮設住宅やそれに類する

現段階での諸措置は、復旧・復興に向けて「足場」が組まれるということの意味するのであり、肝心要のことは、この「足場」を用いて復旧・復興という「建物」がどのように構築されるかということである。私は、諸関係の断絶によって引き起こされた精神的窮乏状態から被災者を救い出すということが、物質的窮乏状態からの救出と同じ比重で、あるいはそれ以上の比重でなされねばならないと思っている。そして精神的窮乏状態からの救出には、我が国の街や村に昭和 30 年代に現出していた空間と同質の空間の創出は不可欠であると思っている。

我が国の街や村に昭和 30 年代に現出していた空間は、自由の気分と共同体意識に溢れる空間であった。それは戦争によって生ぜしめられた関係断絶に呻吟する人々、精神的窮乏状態に陥った人々を救出する上で大いなる力を発揮した空間であった。それは絶大な治癒力を有する空間であった。それは友愛の感情がごく自然に湧き起こる空間であった。

そういう空間は新宿の歌舞伎町にも、新宿の街全体にも、そして我が早稲田大学にも現出し、持続性を保っていた。自由の気分と共同体意識に溢れる空間は文字通り肌で感じられていたから、言葉で表わす必要など全くなかった。いまそれを言葉で表わそうとしても、殆ど不可能である。戦後の我が国の復旧・復興はそういう空間の遍在なしでは、決して達成され得なかった、と私は思っている。

仮設住宅やそれに類するものの供給をもってのうじおわ能事畢れりとするのではなく、あらゆる工

夫と努力を通じて、自由の気分と共同体意識に溢れる持続性ある空間が広くあちこちに創出され、そういう空間内で「被災者に寄り添う」ことが自然に起こるようになるとき、復旧・復興への道が真の意味で拓かれることになるのであろう。

現象の救済への視座

早稲田大学大学院社会科学研究所博士課程
竹之下 夏彦

現代自由主義の泰斗であるフリードリヒ・ハイエクはこう言った。「必然性が理解できないようなことが多くあるということこそ、文明の基本的性質なのである」⁽¹⁾と。すべての社会現象は複雑現象である。現象を構成する諸要素間の連関は看取しがたい。それゆえ、社会に対する人為的介入に際しては、我々は常に慎重であるべきである…。計画経済の破綻という歴史的事実を前にして、この当為命題を真っ向から否定することは困難であろう。しかし時として、現象は、我々がかかる消極性のうちに留まることを許してはおかないものである。此度の東日本大震災は、まさしくその好例ではないだろうか。

私事につき述べることをお許しいただきたい。私自身はこれまで、上に挙げた自由主義の命題をほぼ全面的に支持してきたし、今もそれは変わらない。3.11 以前と以降とで、研究内容に変化が生じたということもない。しかしどういいうわけか、大震災以降、心の奥底

に焦燥とも無力感ともつかぬような、なにか得体のしれないものがずっと巢食っている。それがなかなか解消しないのである。この「得体のしれないもの」の正体とは、一体何であろうか。

本稿の趣旨を外れるゆえ詳細は省くが、自由主義は「放っておけば万事よし」という趣旨の思想ではない。しかし自由主義はその性質上、具体的な問題に対する具体的な処方箋を提示することには慎重にならざるを得ない。問題が具体的であればそれだけ、考慮に入れるべき変数は膨大なものとなり、判断はそういうわけで、自由主義と、現象の救済への無関心との距離は、決して遠くない。両者は常に紙一重のうちにある。

では、私自身はどうであっただろうか？まことに遺憾なことながら、自らの行跡を振り返ってみると、みごとに「現象」への関心が欠落していたといわざるを得ないのである。古書には大いに興味をそそられる。しかし新聞やニュースの類にまともに目を通すことは、殆どない。ネットニュースで簡単な事実関係のみ把握し、いったん記憶の片隅にとどめ、そしてその大半はいつのまにか「どうでもよいこと」になり果てる。支持政党はなく、むしろ現実政治にもほとんど興味を持たない。最後に選挙権を行使したのはいつのことであっただろうか…。

自由主義の消極的性格は知的誠実に基づくものであるが、現象への無関心は知的怠惰に基づく。どうやら私は、知らず知らずのうちに、この知的誠実と表裏一体の知的怠惰へと

はまり込んでしまっていたらしい。

思えば、私が主たる研究対象としてきたT.S. エリオットは、まさに「現象の救済」への視座を保ちつづけた人であった。彼は人々の生活の総体としての文化を「定義しえない」もの、「われわれの計画の無意識の背景をなす」²⁾ものと見なした。その「定義しえない」世界に生起する現象の救済策を考案することは、いかに偉大な知性を以てしても著しい困難を伴うものであったことだろう。事実、エリオットがなしたことは、現象を救済するためのいわば「概念の見取り図」を描くことのみである。彼の試みは成功裏に完了したとは、どうにも言い難い。彼は、文化の消極性のうちに逃避することをよしとしなかった。文化の無限の複雑さを認めつつも、それを前に無気力に陥ることなく、能動的な思索を続けることを選んだのである。先哲と自分とのあいだの知的執念の差に絶望する。

私が一種の知的怠惰、知的無気力に陥っていたことは、先に述べた。此度の震災は、そのような私に、自らの精神的態度を改める機会を与えてくれたように思われる。震災当時私は電車に乗っており、巨大な揺れ（の一端）を体感した。帰宅難民となり、20 km弱の距離を、徒歩にて帰宅した。直接甚大な物的被害を被った人は周囲にいなくとも、そのような家族・知人を持つ人はたくさんいる。そして3.11以降の日本社会は、政治経済界からマスコミ、そして学術・教育の世界にいたるまで、大震災の影響を抜きにしては語りぬものとなっている。現象は、否応なしに私の、

私たちの前に突きつけられる。現象への視座を持つことなく、自らの精神の内部に築き上げた「象牙の塔」に引きこもることは、もはや許されない。現象は、否応なしにわれわれに決断を迫る。

われわれは此度の大地震災をいかにして理解すべきか。またそれに対していかなる見解を持つべきか。この問いに明確な回答を提示することは、私の手に余る。現象をその外部に立って理解することは、著しく困難である。東京にいて以前と変わらぬ生活を送っている私には、現に避難生活を強いられている人々、家族や友人を亡くした人々、そして理不尽な死を強いられた人々…を真に理解することなどできない。そもそも東日本大震災は、今まさに進行中の現象であり、その影響関係・影響範囲を見定めることも、困難である。それは、東日本大震災の陰で、「なかったことにされた」様々な現象との複合が織りなす、著しく複雑なものである、ということが分かるのみである。

しかし上に挙げた困難さは、現象の救済への意思を、そしてそのための思索を放棄する理由にはなり得ない。「理解できない」ことは「理解しようとする意思を持たなくてもよい」ことを意味しはしない。思索を試みたところで、有意なものが見いだされとは限らない。私は結局、「理解できない」という結論に落ち着くだけかもしれない。しかしこの「理解できない」は、知的怠惰に基づいた、安穏としたものであってはならない。それは、長い知的格闘の果てに、刀折れ、矢も尽きた、

身を焦がすような絶望を伴うものでなくてはならないと思うのである。

以上が、未曾有の震災にたいする、一介の青二才の研究者の拙き雑感である。

<注>

- (1) ハイエク、FA『隷属への道』春秋社 1992 p279
- (2) エリオット、TS『エリオット全集』中央公論社 1960
所収『文化の定義のための覚書』p263

非日常性と日常性

早稲田大学国際言語文化研究所招聘研究員
西川 秀和

3月11日、私はいつものようにいつもの公園に散歩に出掛けていた。散歩の途中、後頭部をハンマーで殴られるような不思議な感覚に襲われ自宅に引き返した。そこで震災の第一報を目にした。

テレビが映し出す光景はまさに日常を超えた非日常の世界だった。迫り来る津波。すべてを飲み込む濁流。瓦礫と化した町並。肉親の安否を気遣う人々の泣き声。テレビを通して震災を知った私は、その光景があまりに日常を逸脱しているので俄に信じられなかったくらいであった。

震災は被災地域の人々の日常を完全に奪ってしまったのである。そればかりか尊い命を落とされた方も多い。日常とは私がいつものようにいつもの公園に散歩に出掛けるように毎日繰り返されるものである。公園でいつも

のようにキャッチボールをしている兄弟、愛犬をそれぞれ引き連れて井戸端会議に興じる人々、ジョギングをする男性。一見、それらは何でもないように見えて、実は脆弱で危げな礎に支えられているに過ぎない。3.11 はそれを日本全国の人々に肌で感じさせた。まさに「天災は忘れた頃にやって来る」である。

震災で家を失えばいつものような生活は送れない。震災で家族を失えばいつものような談笑は望めない。震災で町が壊されれば日常の風景そのものが消えてしまう。震災前に日常を送っていた人々の誰がそのようなことを想像し得ただろうか。

震災は日常を奪い非日常を生み出した。徐々に進みつつある復興は少しずつ日常を取り戻す営みである。亡くなった命は戻らないけれども、家々や町並は再建することができる。しかし、本当の復興は被災者が心の底から日常に安住できた時だろう。震災を過去のものとし、未来へ向けて日常を歩み出した時こそが本当の復興が成った時である。まだ本当に多くの被災者が避難所や仮設住宅での生活を余儀なくされている。安否さえ不明の人も多い。本当の復興には程遠いのが現状である。

日常性についてピーター・バーガーとトマス・ルックマンは現象学の名著『日常世界の構成 アイデンティティと社会の弁証法』の中で、日常世界は、社会の個々の成員を超えて存在すると語っている。つまり、ある世代が構築した慣習なり反復が次世代に無意識に受け継がれて制度化されたものが日常性であ

り日常世界であるという。そのような定義に従えば、本当に日常性を取り戻すためには少なくとも一世代の時間を要することになるが、日常世界が甚だしく破壊された場合についてバーガーとルックマンは言及していない。

この震災はいかに日常が脆弱なものかを知らしめたという点では9.11 に匹敵する事件だったように思う。9.11 では世界中の人々が超高層ビルに飛行機が突っ込むという非日常性に驚愕した。テレビでその光景を見ていた私は、その光景がまるで現実のものではなく映画のワンシーンのように感じた。強烈な非日常性という意味で3.11 の震災は9.11 と共通点があるように思う。

9.11 はその後の国際政治の流れを変えた。アメリカは断乎たる武力制裁も辞さなかった。またアメリカ国内では人々の愛国心を鼓舞する結果をもたらした。9.11 という非日常が日常でばらばらに生活している人々の意識を統合し多くの人々の日常を変えたのである。

3.11 はどうだろう。3.11 にともなう原子力発電所の事故はこれから日本の原子力政策の行く末を変えるだろう。再生可能エネルギーに比較して安価で大量な原子力発電に頼ることができなくなれば、短期的には大規模停電の恐れがあり、長期的には電力コストの増大で国内産業のさらなる空洞化をまねくかもしれない。また被災地域に集中していた一部のサプライチェーンも再構築されるだろう。3.11 がもたらした非日常性があまりに大きかったのではやそっくり元通りの日常には戻れないのである。

それでも人々は過去の日常を懐かしむ。それ故、震災前の何気ない情景を映した映像や写真が歓迎されるのである。失った過去の日常の断片として。失った過去の日常性は取り戻すことはできないが、将来に向けて日常性を再構築することができることは先述のバーガーとルックマンの示唆するところである。

「がんばろう日本」のスローガンの下、被災者のみならず我々も多かれ少なかれ日常性の再構築に参加しているのである。3.11 が歴史として語られるようになった時、非日常性からようやく脱却したと言えよう。その時になって初めて復興の完了が高らかに宣言されるだろう。

東日本大震災を振り返る

元早稲田大学奨学課長 羽田 紀男

今年（2011）は、東日本大震災をぬきにしては語ることはできない。今回の大震災は、大規模過ぎて想定を超える「想定外」だからという言葉をよく聞いた。想定できることをしなかったための言い訳にしていたような気がしてならない。人間は自然を制御できないのだから、自然に対するおごりがあったのではないか。

9 カ月が過ぎて、犠牲者は死者・行方不明者を含めて 19,312 人、身元不明の遺体 1,100 体、うち津波による水死 92%、身元が判明した犠牲者の 65%は 60 歳以上が占めている。多くの高齢者が逃げ遅れたことも改めて浮か

び上った。

現在も実態は把握されていないが、両親とも亡くなった 18 歳未満の震災孤児は判明しているだけで 240 人。片親の亡くなった震災遺児は 1,567 人に上る。遺体が見つからず、親ときちんと別れができていない子が数百人はいるという。孤児・遺児を支える側の大人たちも深く傷ついている。子どもたちは、自分自身の悲しみだけでなく残された家族の痛みとも向きあっていかなければならない。

この子らが、将来の可能性まで奪われないよう経済援助や心のサポートをどうするか、手厚く、息長く、学びや育ちを応援し続けることが必要である。国としても将来を担う、震災孤児・遺児の支援制度を整えるべきではないだろうか。

今回の震災では津波、原発事故と電力危機、放射能による農産・畜産・水産物等汚染、ガソリン不足と物流停滞、高齢被災者の多さ、部品工場の被災による部品供給網の寸断などが重なった。

東北地方に多数の重要なものづくり拠点があることを世界中に知らしめることになった。被災地には、大手メーカーの 3 次、4 次の下請け企業が多数存在し、その企業の部品や材料がそろわないかぎり、日本国内ばかりでなく、世界各地でも操業が止まる工場が相次いで出現し生産基盤を失った。地震と電力供給のリスクがある東北から工場を海外へ移す動向も予想される。町をまるごと失い、放射能におびえ、仕事と安全な将来も見えない状態が続けば、若者から先に東北を離れてゆく。

懸念されるのがその過疎化である。

そのような状況にあつて、企業としての思惑もあるだろうが、豊田章男トヨタ自動車社長は7月19日、東北復興支援策として、エンジン工場の新設を柱とする東北地方での生産体制強化を発表した。「私たちの踏み出す一歩が、東北の未来、笑顔につながることを信じる」と述べている。東北地方「復興支援」の強化策につながることを期待したい。

日本は安全・安心な経済大国だ、技術立国だといいいながら、米国のロボットが原発建屋に入りその撮影しているのを見て、日本はロボット大国だといいいながら何一つできなかったことに、その技術の一貫性の無さに歯がゆい思いがした。

国として、何もかも失って生活の糧をなくしている住民に、まずどう復旧・復興していくのか、その青写真を示し、希望を持たせることが大切だ。関東大震災時(1923.9.1)に後藤新平が「帝都復興院」を設立し明確な方針をうちだした経緯がある。

政府は、「復興構想会議」を立ち上げたが、メンバーを見て驚いた。議長と議長代理の1人が政治学者で、委員は脚本家、住職、新聞記者ら一見多彩な人選だ。しかし、一体何を目指しているのかが見えなかった。何もビジョンを示さずにいきなり税の話が出るのは如何なものか？6月の提言では①復興財源として所得税などの増税を求める方針を堅持、②特区の活用、③再生エネルギー利用の促進など。復旧・復興の中身がよく見えてこない。

復旧・復興は被災地・被災者に寄り添った

地元の自治体の裁量で行なえるよう、国はどう資金の手当てをしていくかを考えるべきではないか。そして、何より避けなければならないことは、復旧・復興が政治家により利益誘導に使われたり、自治体ごとの利益追求の場にされたりすることだ。

未曾有の大災害から、私たちは何を学ぶべきか。危機管理の大切さ、災害に強い街づくりといった行政上の問題に加え、助け合いや共生の精神がいかに大切かを…。

私たちは、今まで余りにも便利さを追い求めてきた。これからは身の丈に合った生活を心がけるべきではないか。

経済活動を着実に続けるために、自粛モードも高まったが、それで経済活動を止めたら、復興はかえって遠のく。いま一番大切なことは風評被害、風化をどう防ぐかが課題ではないかと思う。支援の気持ちを忘れずに、萎縮することなく、落ち着いた普段通りの生活をして行くことではないか。

地震発生時から、政治家が何をしていたのか残念ながら見えてこなかった。国や国民のために志して政治家になったはずだ。いち早く現地に行き、自分の目で見て、頭で考え、心で感じる事が大切だ。国の代表として、こんな時こそ政治家としての真価が問われるのである。国難と言いながら、彼らは一体何をしていたのか疑問だった。被災者のことを忘れ、想像力も責任感もなく信念なき政治家に絶望してしまう。国民として恥ずかしい。

政治は追及、批判する場ではなく、提案する場であつて、政党間の争いをしている時で

はない。お互いが国益のためには何をすべきか第一に考えるべきだ。政治は国民に安心を与えるために、小異を捨て大同につくことが大切だ。9月2日、新政権が発足した。早急に政策目標をあげ、政治の空白を失くし、国民の政治不信を払拭してほしいと期待したが、早々に不適切発言で辞任する大臣も出て、信頼できる政権にすることが課題となった。

東京電力福島第1原発の場合は、現場から全然情報が出なかったのが不思議でならない。

事実は一つしかないのに、記者会見を官邸、原子力安全・保安院、東京電力が別々に行なった。なぜ、一番わかっている現場の福島で情報を出せなかったのか。官邸はそれへの対応や方針を決定すれば良いのであって、官房長官がいちいち事実を説明する必要があったのだろうか。この点については、海外メディアからも「情報発信で肝要なのは『一つの声』を持つことだ。政府と東電が違う場所で記者会見を開き、違う情報を発信してきたが、これが国内外で困惑を生む要素になってきた」と指摘していた。

いま早急にすべきは、原子力発電のあり方、代替エネルギーなど電力政策をどうするか。物流・産業構造のあり方、行政の縦割りの弊害、それぞれの危機対応のあり方などを検討すべきだ。それらが整ったところで、一極集中の危うさ、首都機能はこれでよいのかなども含めた検討も必要である。少子高齢化、人口減少化のなかにあって、大量生産、大量消費の時代ではない。それにどう向きあい、どう解決していくのが問われているのである。

まさに国づくりを根本から考え直さなければならぬときにきている。

日本は世界に安全・安心を売り物にしてきた。それが崩れたのである。今まで余りにも、安全・安心に慣れ過ぎて、心のどこかにゆらみがあったのではないか。それを取り戻すためにも、国の対応を期待したい。

これからは身近にあるモノを大切にしながら、希薄になった人間関係をとり戻し、風評におどらされることなく、冷静な行動をとることが求められる。

震災後の冷静で落ち着いた対応を全世界が称賛したのを見てもわかる通り、日本人は世界でもトップクラスの民度の高い国民だ。それに政治がついてこないのが情けない。

あの日、生きのびた人たちの経験をどう活かしていくのか、これ以上被害を繰り返さないために、大切な命を守るため、私たち1人ひとりに問いかけている。起きたことは元に戻せない。これからはどれだけ賢くなるか。今度こそ、災害に負けない国づくりに取り組んでいくことではないか。